

# 「ポストヒューマン時代」における人間存在の諸問題

——〈自己完結社会〉と「世界観Ⅱ人間観」への問い

上柿 崇英

## 1. はじめに

ビッグデータ、AI、ロボット、生命操作などの進展を通じて、われわれはいまや、身体と機械、脳とAI、治療と人体改造の境界が曖昧となっていく時代を生きている。それは、これまで自明とされてきた「人間」の概念が通用しなくなる時代という意味において、「ポストヒューマン時代」と呼ぶことができるだろう。そして総合人間学の中心的な問いが、まさしく「人間存在の本質とは何か」というものであるとするなら、この時代の局面をどのように理解し、どのように意味づけるのかということは、総合人間学においても避けて通ることができない重要な課題となるはずである<sup>1)</sup>。

本論では、まず前述した諸々の「ポストヒューマン時代」の科学技術について、具体的にみていくことから始めよう。そしてその技術的現実が、われわれをいかなる世界へと向かわせつつあるのかについて、R・カーツワイル (R. Kurzweil) や Y・ハラリ (Y. Harari) の分析を交えつつ、さらには独自に〈自己完結社会〉というキー

ワードを用いて考察することにした。〈自己完結社会〉とは、人々が高度に発達した社会システムに深く依存することによって、生身の他者と関わっていく必然性、生身の身体とともに生きる必然性を失っていく社会のことを指している。

確かに「ポストヒューマン時代」の到来は、しばしば「人間疎外」や「管理社会」といった枠組みの延長線上で語られることが多いだろう。しかし事態は、それほど単純なものとは言い難い。この問題の難しさは、その矛盾の本質が、自由、平等、多文化共生をはじめ、われわれがこれまで希求してきた人間的理想と密接に関わっていることにある。端的に述べれば、われわれが信じる「あるべき人間(社会)」の理念に即すと、「ポストヒューマン化」は批判の対象になるどころか、その理想を実現するためにこそ、われわれは「ポストヒューマンな存在」になるべきだ、との主張が導かれるからである。

議論の後半では、こうした矛盾がなぜ生じるのかについて、われわれの認識や思考の背後にあつて、それを加速させている〈無限の生〉の「世界観Ⅱ人間観」というものから読み解いてみたい。〈無限の生〉とは、「意のままになる生」のことを指し、その「世界観Ⅱ人間観」のもとでは、人間の使命とは、「意のままにならない生」の現実を克服し、それをあるべき理念に相応しい形に改変していくことであると理解される。そしてそこでは、その理想の形式が、現実否定に基づくとゆえに、ある種の「無間地獄」をもたらす様子について見ていこう。注目すべきは、今日においては、それが「あるべき私の生」と「現実のこの私の生」をめぐる矛盾となって現れているということである。ここから本論では、われわれが新時代の社会システムや科学技術を通じて「意のままにならない身体」や「意のままにならない他者」から解放されるほどに、かえって苦しみを深めていくメカニズムについて見ていくことにしよう。

〈無限の生〉がもたらす理想の矛盾は、おそらくわれわれが身体を完全に捨て去った「脳人間」になるか、ある

いは脳さえ捨て去った「思念体」になるまで続くだろう。その究極の「ユートピア」においては、人間存在の「自己決定」と「自己実現」は、かつてない水準へと上昇する。われわれはそこで、理念が指し示す「完全な人間」に到達するのである。しかしそこには、人間など、もうどこにも存在していない。このことは何を意味するのだろうか。本論では、順を追って説明していくことにしよう。

## 2. 「ポストヒューマン時代」のリアリティ

(1) 現代科学技術がもたらすもの

それでは最初に、「ポストヒューマン時代」を特徴づける技術的現実のいくつかについて、具体的に見ていくところからはじめよう。

最初に注目したいのは、情報/人工知能技術である。例えば今日、われわれの生活の背後では、インターネットの閲覧履歴、購買履歴、移動(GPS)履歴、通話履歴、監視カメラの履歴などを含むビッグデータが日々蓄積され、解析されている<sup>(2)</sup>。また、脳の神経回路を模した第三世代のAI技術であるディープラーニングは、膨大なデータのなかから特徴的な結びつきを自ら掘り下げ、自動的にある種の「概念」を構築することができる<sup>(3)</sup>。そこからもたらされるのは、車の自動運転やチェスで人間を打ち負かすAI、バッハ風の音楽を制作できるAIだけではない。われわれは今日、自らの買うべき商品、出会うべき相手、必要とされる医療などの「最適解」をAIが提案してくれる時代を生きているのである<sup>(4)</sup>。

こうした技術は、もちろん社会政策にも応用されている。その代表は、さまざまなビッグデータを解析して、いつどこで犯罪が生じるのかをAIが予測する犯罪予測プログラムだろう<sup>(5)</sup>。また、個人の社会的な信用度をAIが評価する「信用スコア」は、結局実用化には至らなかつたものの、もともとは個人の行動履歴を点数化することによって、ビジネスを効率化し、人々に善行を促すことを目的に提案されたものであった<sup>(6)</sup>。

次に、サイボーグ/ロボット技術について見てみよう。例えばSFでお馴染みのパワースーツは、今日軍部においてだけでなく、疲労しない歩行を実現するアダプターとして、すでに民間の医療現場で実用化されている<sup>(7)</sup>。2021年には、全身マヒ(ALS)患者で、人工臓器を含むさまざまなデバイスを組み合わせ、全身サイボーグになることを選択したP・スコット・モーガン氏が話題を呼んだだろう<sup>(8)</sup>。しかし何より目を引くのは、念じるだけで機械のアームを自在に動かすことができる、ブレイン・マシン・インターフェイス(BMI)である<sup>(9)</sup>。その目的は、もちろん医療や福祉を出発点とするものだったが、その技術自体は理論上、健常者であっても、第三の腕や、腕とは異なる何ものかを脳から直接遠隔操作できるようになることを意味している。

またロボットに目を向ければ、その活躍の場は、今日組み立て工場だけでなく、介護やサービス業の現場、そして戦場となっている。なかでも人間の関与なしに自動で敵を殺傷できる自律型致死兵器システム(LAWS)に対しては、多くの人々が警鐘を鳴らしているところだろう<sup>(10)</sup>。他方で、人間を模した機械であるアンドロイドは、すでに「不気味の谷」を突破し、ある程度のコミュニケーションを実践できるようにまでなっている。人々と「会話」をし、より「人間らしい」振る舞いのために、話の間(テンポ)、表情、瞬きなどの微細な動作が再現できるようになっている<sup>(11)</sup>。

確かにアンドロイドは、そのように振る舞うだけで、会話そのものを「理解」していないという指摘もあるかもしれない。しかしわれわれは、会ったこともない文通相手に対しても、悲しんだり、慰められたりしている。コミュニケーションにおいて重要なことは、その先に本当に生身の人間がいるかどうかではなく、あくまで心を持った何ものかがそこに存在すると思える、ということであるとすると、アンドロイドもまた、パートナーとし